

DAS KAPITAL

資本論

カール・マルクス

社会科学研究所 監修
資本論翻訳委員会 訳

4



新日本出版社

カール・マルクス

資 本 論

4

第一卷 第四分冊

社会科学研究所 監修
資本論翻訳委員会 訳

資 本 論——第4分冊（全14冊）

1983年5月27日 初 版

定価 750円

1983年5月28日 第2刷

監修者	日本共産党中央委員会付属 社会科学研究所
訳者	資本論翻訳委員会
発行者	松 宮 龍 起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-8

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京 (478) 3311

振替番号 東京 3-13681

印刷 光陽印刷 製本 みさと製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

凡 例

一 本書は、カール・マルクス著『資本論』第一—第三部の全訳であり、新書判全一三分冊で刊行され、総目次・総索引を収めた別冊がこれに加わる。

二 翻訳にあたっては、ドイツ語エンゲルス版を主たる底本としてドイツ語各版のほか、英語版、フランス語版、ロシア語版その他各国語諸版を照合または参照の上、訳出した。(訳出に使用された各国語諸版については本凡例末参照) また、従来の邦訳はすべて参照した。

三 注については、マルクス、エンゲルスによる原著者注は()に漢数字を用いてそれを示し、各段落のあとに訳出した。なお、訳文中や、*印によつて訳文のあとに、()を用いて挿入されたものはすべて訳者による注および補足である。これらは今回の訳出にあたり独自に作成された。

四 訳注のなかで、『邦訳』全集、第〇巻、〇〇ページとあるのは、ドイツ民主共和国ディーツ社発行の『マルクス・エンゲルス著作集』^{ヴェルケ}を底本とした邦訳『マルクス・エンゲルス全集』(大月書店)の巻数とページ数をさしている。

五 『資本論』のドイツ語原文にあたろうとする読者の便宜のために、わが国で現在入手の容易なヴェルケ版『資本論』(ディーツ社)の原書ページ数を、訳文の欄外上に()を用いて付記した。

六 訳文中の“ ”でくくられた語、句、文は、すべて、原著者によってドイツ語以外の国語（ラテン語などを含む）が単独で使用されている個所の訳である。なお、それらドイツ語以外の国語による語、句、文が、同じ意味のドイツ語と併記されていて、相互の言い換えとして使用されている場合には、それらにニュアンスの相違がある場合をのぞき、該当の他国語の訳出や明示を省略した。文意を理解するうえで必要な場合には、原語がそのまま示されている。

七 原著者の引用文にその原典との相違がある場合には、原則として原著者の引用により訳出し、必要な場合には訳注によりその異同を示した。

八 引用文献のうち邦訳のあるものは、入手の便宜なども考慮し、適当と思われるものを「」を用いて掲げた。ただし、訳文については、掲げた邦訳書のそれに必ずしもよっていない。

九 訳文で、傍点を付した部分は原文のイタリック体の部分を表わしている。

一〇 人名、地名等については、それぞれの国での発音の再現につとめたが、わが国での慣用に従ったものもある。

二 本訳書については日本共産党中央委員会付属社会科学研究所が監修を行なった。研究所の委嘱により、五〇名を超える研究者が訳出に参加し、翻訳のための委員会が組織され、さらに経済学以外の領域の研究者多数の協力を得た。翻訳者は各分冊ごとに訳出グループを編成し、すべての分冊にわたる全体の協議会、分冊グループ内あるいは若干の分冊グループ相互の検討会が行なわれ、分冊ごとに作成された訳稿を、さらに独自に編成された全巻にわたる編集・統一者グループがあらため

て全体との関連から詳細に検討を加えたうえ、分冊グループとの協議を繰り返して完成稿とした。それらの作業の過程で、経済学以外の学問の研究者から提出された意見が参考にされた。

本分冊（第四分冊）については、各分野の研究者の協力を得ながら、左記の体制で訳出・編集が行なわれた。

訳出グループ

第六篇／上林貞治郎（代表者） 芦田 亘（第一七―二〇章）

第七篇／林 直道（代表者） 上野俊樹（第二章） 角田修一（第二章第一―二節）

松永佳子（同章第三―五節） 芦田 亘（第三章第一―四節） 井上純一（同章第五

節） 佐々木建（第二四―二五章）

編集・統一者 岡本博之 宇佐美誠次郎 土屋保男 杉本俊朗 朝野 勉 種瀬 茂

（付） 第一巻の翻訳にあたって使用された各国語版

ドイツ語版については、初版、第二版、第三版、第四版、カウツキー版、インスティトゥート版、ヴェルケ版を利用し、また、以下の各国語諸版を照合または参照した。英語版（モスクワ版、ドウナ・トール版、ペリカン版、ポール版、カー版、ゾンネンシャイン版）、フランス語版（ロワ版、エディシオン・ソシアル版、コスト版）、ロシア語版（サチネーニャ版、ステパーノフ版）、さらに、スペイン語版（メキシコ版、アルゼンチン版）、イタリア語版（リウニティ版、ウテート版）、中国語版、朝鮮語版、ポーランド語版、チェコ語版、ハンガリー語版、ルーマニア語版、ブルガリア語版、フィンランド語版、ほか。

目次

第六篇 勞 賃	九二五
第七章 勞働力の価値または価格の勞賃への転化	九二五
第八章 時間賃銀	九二九
第九章 出来高賃銀	九四三
第二十章 勞賃の国民的相違	九五八
第七篇 資本の蓄積過程	九六七
第二十一章 單純再生産	九七〇
第二十二章 剰余価値の資本への転化	九九三
第一節 拡大された規模での資本主義的生産過程。商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転換	九九三
第二節 拡大された規模での再生産にかんする経済学上の誤った見解	一〇〇八

第三節	剰余価値の資本と収入とへの分割。節欲説……………	一〇二四
第四節	剰余価値の資本と収入とへの比例的分割から独立して蓄積の規模を規定する諸事情——労働力の搾取度、労働の生産力、充用される資本と消費される資本との差額の増大、前貸資本の大きさ……………	一〇三九
第五節	いわゆる労働元本……………	一〇四六
第二三章	資本主義的蓄積の一般的法則……………	一〇五三
第一節	資本の構成が不変な場合における、蓄積にともなう労働力需要の増大……………	一〇五三
第二節	蓄積とそれにとともなう集積との進行中における可変資本部分の相対的減少……………	一〇七〇
第三節	相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産……………	一〇八一
第四節	相対的過剰人口のさまざまな実存形態。資本主義的蓄積の一般的法則……………	一〇八一
第五節	資本主義的蓄積の一般的法則の例証……………	一一一三
a	一八四六—一八六六年のイギリス……………	一一一三
b	イギリスの工業労働者階級の薄給層……………	一一三三

c	移動民……………	一二九
d	労働者階級中の最高給部分におよぼす恐慌の影響……………	一四三
e	大ブリテンの農業プロレタリアート……………	一五四
f	アイルランド……………	一九六
	第二四章 いわゆる本源的蓄積……………	二二一
	第一節 本源的蓄積の秘密……………	二三一
	第二節 農民からの土地の収奪……………	二三七
	第三節 一五世紀末以来の被収奪者にたいする流血の立法。労賃引き下げのための諸法律……………	二五八
	第四節 資本主義的借地農場経営者の創生記……………	二七一
	第五節 工業への農業革命の反作用。産業資本のための国内市場の形成……………	二七六
	第六節 産業資本家の創生記……………	二八三
	第七節 資本主義的蓄積の歴史的傾向……………	二八三
	第二五章 近代的植民理論……………	二八八

第一卷分冊目次

第一分冊

第一部 資本の生産過程

第一篇 商品と貨幣

第一章 商品

第二章 交換過程

第三章 貨幣または商品流通

第二分冊

第二篇 貨幣の資本への転化

第四章 貨幣の資本への転化

第三篇 絶対的剰余価値の生産

第五章 労働過程と価値増殖過程

第六章 不変資本と可変資本

第七章 剰余価値率

第八章 労働日

第九章 剰余価値の率と総量

第三分冊

第四篇 相対的剰余価値の生産

第一〇章 相対的剰余価値の概念

第十一章 協業

第十二章 分業とマニファクチュア

第十三章 機械設備と大工業

第五篇 絶対的および相対的剰余価値の生産

第十四章 絶対的および相対的剰余価値

第十五章 労働力の価格と剰余価値との大きさの変動

第十六章 剰余価値率を表わす種々の定式

第四分冊

第六篇 労働賃

第十七章 労働力の価値または価格の労働への

転化

第十八章 時間賃銀

第十九章 出来高賃銀

第二〇章 労働の国民的相違

第七篇 資本の蓄積過程

第二一章 単純再生産

第二二章 剰余価値の資本への転化

第二三章 資本主義的蓄積の一般的法則

第二四章 いわゆる本源的蓄積

第二五章 近代的植民理論

第六篇 労 賃

第一七章 労働力の価値または価格の労賃への転化

ブルジョア社会の表面では、労働者の賃銀は、労働の価格、すなわち一定分量の労働にたいして支払われる一定分量の貨幣として現われる。この場合には、人は、労働の価値について語り、この価値の貨幣表現を労働の必要価格または自然価格*と名づける。他方、人は、労働の市場価格、すなわち必要価格の上下に変動する価格について語る。

しかし、商品の価値とはなにか？ 商品の生産に支出される社会的労働の対象的形態である。また、われわれは、この価値の大きさをなにによつてはかるのか？ 商品に含まれる労働の大きさによつてである。それでは、たとえば一二時間労働日の価値は、なにによつて規定されるのであろうか？ 一二時間労働日に含まれる一二労働時間によつて——これは、ばかげた同義反復である。^(二)

(三) 「リカード氏は、一見したところ、価値は生産に用いられる労働量に依存する」という彼の理論と衝突

(558)

する恐れのある困難を、実に巧妙に避けて通る。もしこの原理が嚴重に守られるなら、労働の価値は労働の生産に用いられる労働量に依存するということになる——これは明らかに無意味である。それゆえ、リカード氏は、巧みに方向を変えて、労働の価値を、賃銀の生産に必要な労働の量に依存させる。あるいは彼自身の言葉で言えば、労働の価値は賃銀の生産に必要な労働量によって評価されるべきであると主張する。ここで彼が意味するものは、労働者に与えられる貨幣または商品の生産に必要な労働量のことである。これは、布の価値はその生産に費やされた労働量によってではなく、布と交換される銀の生産に費やされた労働量によって評価されると言うのと同じである」(『S・ペイリー』『価値の性質……に於ける批判的論究』、五〇、五一ページ(鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判』、『世界古典文庫』、日本評論社、六四ページ))。

* (価値を貨幣で表わした場合の評価を、アダム・スミスは「自然価格」と名づけ、フランスの重農主義者チュルゴらは「必要価格」「基本価格」と名づけた。本訳書九二二ページの訳注*1参照)

労働は、商品として市場で売られるためには、それが売られる以前に必ず実存していなければならぬであろう。しかし労働者が労働に自立の実存を与えうるのであれば、彼は、商品（三三）を売るのであって、労働を売のではないであろう。

(三) 「諸君が労働を商品と名づけるとしても、労働は、商品——まず交換するために生産され、次いで市場にもっていかれ、そこで、そのとき市場にありうる他の商品とそれぞれ相応の割合で交換されなければならない商品——と同じものではない。労働は、市場にもっていかれる瞬間につくり出される。いやそれどころか、労働がつくり出されるより以前に、市場にもっていかれるのである」(『経済学におけるある種の用語論争の考察』、七五、七六ページ)。

このような相互矛盾は別としても、貨幣すなわち対象化された労働と、生きた労働との直接的交換は、まさに資本主義的生産の基礎ではじめて自由に展開される価値法則を廃除するか、または、まさに賃労働にもとづいている資本主義的生産そのものを廃除するであろう。一二時間の労働日が、たとえば六シリングの貨幣価値で表わされるとしよう。いま、等価物どうしが交換されるものとしよう。そのときには、労働者は一二時間の労働にたいして六シリングを受け取る。彼の労働の価格は、彼の生産物の価格と等しいであろう。この場合には彼は、労働の買い手のためになんらの剰余価値をも生産せず、六シリングは資本に転化せず、資本主義的生産の基礎は消滅することになるであろうが、しかし、この資本主義的生産の基礎においてこそ、労働者は自分の労働を売り、彼の労働は賃労働なのである。また、労働者は一二時間の労働にたいして六シリングよりも少なく、すなわち一二時間の労働よりも少なく受け取るものとしよう。一二時間の労働は、一〇時間、六時間などの労働と交換される。このように不等な大きさを等置することは、価値規定を廃除するだけではない。このような自己自身を廃除する矛盾は、そもそも法則として言い表わし、または定式化することさえできない。^{三三}

(三) 「労働を一商品として取り扱い、また労働の生産物である資本を他の一商品として取り扱う場合に、もしそれら二商品の価値が等しい量の労働によって規制されるとすれば、ある与えられた量の労働は……それと等しい量の労働によって生産された量の資本と交換されるであろう。過去の労働が……それと同じ量の現在の労働と交換されるであろう。しかし、労働の価値は、他の商品との関係では……等しい量の労働によって規定されはしない」(E・G・ウェイクフィールド編、A・スミス著『諸国民の富』、ロンドン、一八三五

年、第一卷、二三〇、二三一ページの編者注。

(559)

一方は対象化された労働であり、他方は生きた労働であるという形態的区別から、より多くの労働とより少ない労働との交換を導き出すことは、なんの役にも立たない。^(二四)一商品の価値は、現実とその商品のうちに対象化されている労働の分量によってではなく、その商品の生産に必要な生きた労働の分量によって規定されるのであるだけに、右の導き出しは、なおのことばかっている。ある商品が六労働時間を表わすとしよう。もしこの商品を三時間で生産しうる諸発明がなされるならば、すでに生産された商品の価値も半減する。この商品は、いまや、以前の六時間ではなく、三時間の社会的必要労働を表わす。したがって、商品の価値の大きさを規定するのは、その商品の生産に必要な労働の分量であって、労働の対象的形態ではない。

(四)「行なわれた労働が、行なわれるべき労働と交換されるときには、いつでも、後者」(「資本家」)「が前者」(「労働者」)「よりもより高い価値を受け取るべきである」と取り決められ」(「社会契約」の新版だ)「なければならなかった」(シモンド「すなわちシスモンディ」『商業的富について』、ジュネーヴ、一八〇三年、第一巻、三七ページ)。

商品市場で貨幣所有者に直接に相対するのは、実際には労働でなくて労働者である。労働者が売るのは彼の労働力である。彼の労働が現実が始まるやいなや、彼の労働はすでに彼のものではなくなっており、したがってもはや彼によって売られえない。労働は価値の実体であり、価値の内在的尺度であるが、労働そのものはなんらの価値ももたない。^(二五)

(三) 「労働は、価値の唯一の尺度……すべての富の創造者であって、商品ではない」(Th・ホジスキンの『通俗経済学』、一八六ページ)。

「労働の価値」という表現においては、価値概念が完全に消し去られているだけでなく、その反対物に変えられている。この表現は、たとえば土地の価値と同じように、一つの想像上の表現である。とはいえ、これらの想像上の表現は、生産諸関係そのものから発生する。それらは、本質的諸関係の現象形態を表わすカテゴリーである。現象においては物がしばしばさまに見えるということとは、経済学以外のすべての科学ではかなり知られている。

(三) これに反して、これらの表現を単なる「詩的許容」であると説明することは、分析の無能力を示すだけである。それゆえ、私は、「労働が価値を有すると言われるのは、労働が商品そのものではなく、価値が労働のなかに潜勢的に含まれていると考えられるからである。労働の価値とは、比喩的な表現なのである……」というブルードンの空文句に反対して、次のように述べる——「一つの恐るべき現実性である商品としての労働のなかに、彼は、文法上の略語法しか見ない。それゆえ、労働の商品的性格に基礎をおくことにちの社会全体が、今後は、詩的許容のうえに、比喩的表現のうえに、その基礎をおく。もし社会が、自分を苦しめる『すべての支障を取りのぞく』こうと思うなら、社会は、この耳ざわりな表現を取りのぞき、言葉を変えればよい。そのためには、社会がアカデミーに辞書の新版を出版するように申し出るだけでよい」(K・マルクス『哲学の貧困』、三四、三五ページ〔邦訳『全集』、第四巻、八五、八六ページ〕)。もちろん、価値についてはまったくにも考察しないほうが、もっと好都合である。その場合には、すべてをあっさりこのカテゴリーのもとに包摂することができる。たとえばJ・B・セーがそうしている。「価値」とはなにか？

答え——「ある物が値するところのものである」。また「価格」とはなにか？ 答え——「貨幣で表現さ

れたある物の価値」。それでは、なぜ「土地の労働が……価値をもつのか？ 人がそれに価格をつけるからである」。したがって、価値とはある物が値するところのものであり、土地は、人がその価値を「貨幣で表現する」から「価値」をもつのである。これは、いずれにせよ、物の、なにゆえに、および、なんのために、について了解するためのきわめて簡単な一方法である。

*1「詩的效果をあげるための自由な破格・逸脱の表現法。フアイドロス『寓話』、第四卷、二五の八や、セネカ『自然の諸問題』、第二卷、四四の一」

*2「セー『経済学概論』、第四版、パリ、一八一九年、第二卷、四八六、五〇七ページ。第四版以後つけられた定義集からの引用。なお、増井幸雄訳『経済学』、下巻、岩波書店、五五九、五九八ページ参照」

(560) 古典派経済学は、日常生活から無批判に「労働の価格」というカテゴリーを借用し、そのあとで、この価格がどのように規定されるか？ と自問した。まもなく古典派経済学は、次のことを——すな

わち、需要供給の関係における変動は、他のあらゆる商品の価格についてと同じように労働の価格についても、価格の変動、すなわちある一定の大きさの上下への市場価格の動揺のほかには、なにも説明しないということを認識した。需要と供給とが一致すれば、その他の諸事情が不変ならば、価格の動揺はやむ。しかしそのときには、需要供給もまた、なんらかの説明であることをやめる。需要と供給が一致するとき、労働の価格は、需要供給の関係とは独立に規定される労働の価格、すなわち労働の自然価格であり、こうしてこの価格が、実際に分析されるべき対象であることが見いだされた。あるいは、たとえば一年というかなり長期の市場価格の諸動揺を取り上げてみると、その騰落が相殺さ

(561)

れて、ある中位の平均的大きさ、ある不変の大きさになることが見いだされた。この平均的大きさは、もちろん、互いに相殺されるそれ自身からの諸背離とは違った仕方で規定されなければならなかった。労働の偶然的市場価格を支配し規制するこの価格、すなわち労働の「必要価格」(重農主義者)または「自然価格」(アダム・スミス*)は、他の諸商品の場合と同じように、貨幣で表現された労働の価値でしかありえない。このようなやり方で、経済学は、労働の偶然的諸価格を通して労働の価値に迫っていくと考えた。次に、この労働の価値は、他の諸商品の場合と同じように、さらに生産費によって規定された。しかし、生産費——労働者の生産費、すなわち労働者そのものを生産あるいは再生産するための費用とはなにか？ 経済学にあつては、本来の問題(労働の価値)が無意識的にこの問題にすり替えられた。というのは、経済学は、労働そのものの生産費でどうめぐりをして、少しも進まなかったからである。したがって、経済学が労働の価値と名づけるものは、実際には労働力の価値であり、この労働力は、労働者の人身のうちに実存するのであって、それがその機能である労働とは別のものであることは、機械がその作動とは別のものであるのと同じである。労働の市場価格と労働のいわゆる価値との区別、この価値と利潤率との、また、労働によって生産される商品価値などとの関係に没頭したので、分析の進行が、労働の市場価格から労働のいわゆる価値に行きついただけでなく、この労働の価値そのものをまたもや労働力の価値に分解するところまですでに行きついたことには、だれも一度も気がつかなかった。自分自身の分析のこの帰結を意識していなかったこと、考察の対象である価値関係の最終的な妥当な表現として「労働の価値」、「労働の自然価格」などの諸カテゴリー